

# 令和6年度 学校評価 品川区立第三日野小学校

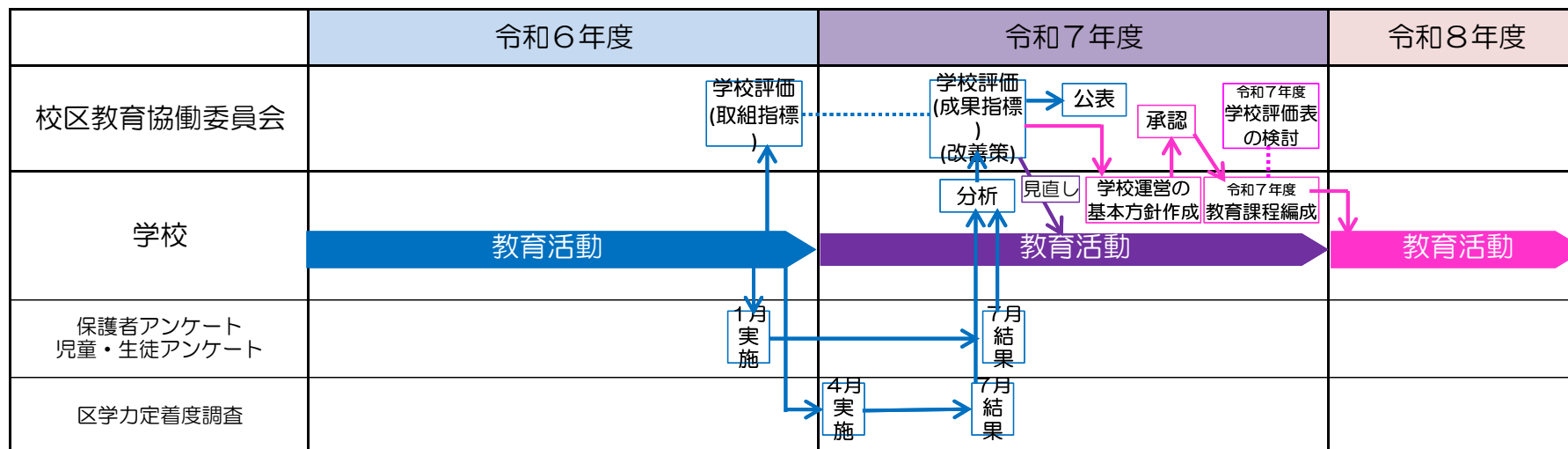
品川区立第三日野小学校 校長 松本 寛  
 第三日野小学校校区教育協働委員会 委員長 佐藤 隆之

校区教育協働委員会は、品川区校区教育協働委員会設置要綱（改正 令和5年3月24日 教育長決定 要綱第5号）に基づき、次に掲げる事項について、学校評価を行っています。

- (1) 学力に関すること。
- (2) 人間性や社会性に関すること。
- (3) 体力・健康に関すること。
- (4) いじめ防止の取組に関すること。
- (5) 特色ある教育活動に関すること。

学校評価を行う際、評価項目ごとに「成果指標」と「取組指標」を設定し、取組状況と取組によって表れた成果について把握しています。学校評価により浮き彫りになった学校の課題を委員会で共有し、改善策を考えました。学校評価の結果を公表するとともに、今年度の取組の見直しや来年度の教育課程の編成に生かしていきます。

## 学校評価の流れ（※令和6年度の学校評価が令和7年度および令和8年度の教育活動につながる部分のみ表記しています。）



令和6年度 学校評価 品川区立第三日野小学校

評価項目1 学力に関すること

重点目標		【基本的な考え】 ◇児童が生涯にわたって学び続けようとする態度とそれを支える知識、技能を習得させる。 ◇身に付けさせたい力:主体的に学習に取り組む力。読み、書き、計算など学習の基礎基本となる力、及び思考力・判断力・表現力。 【重点的な実践内容】 ・タブレット端末を有効に活用する。 ・個別指導時間のマイタイム、品川地域未来塾、寺子屋などで補充学習を充実させる。 ・算数科の少人数習熟度別学習(3~6年)非常勤講師によるサンライト教室(1・2年生)、指導助手によるきめ細やかな指導(1~6年生)を行う。		
評価指標	最上段:成果指標	最上段:成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降:取組指標	2段目以降:取組指標の達成状況の説明		
①	【問題解決力】70%の児童が、自ら問いを見付け、課題解決したり、自分の思いや考えを豊かに表現したりすることができるようにする。	通常の授業の中で対話的な学習をすすめたり、探究学習でグループで伝え合う活動をおこなっているが、76%の児童が主体的に参加し、表現できているが、個人差がある。	A	主体的・対話的な学習の達成度として70%を超えていた。主体的・対話的な学習をすすめることで、自分の考えを他者に伝えるための工夫や他者と自分との相違点に気づき、学ぶ姿が見られるようになった。来年度も普段授業でも発表の機会を設け、探究学習発表会につなげていく。
	【表現力】 学んだことを他者にプレゼンテーションする学習活動を学期に1回以上行い、児童が自分の思いや考えを伝えることができるようにする。	国語科・社会科・市民科一貫プランなどを中心に、学期に1回以上発表形式の学習活動を取り入れることができた。プレゼンテーションする活動を引き続き取り入れていく。	A	
	【学習活動の工夫】生活科・市民科一貫プランを中心に、児童が自ら問を見つけ、協働的な学びを通して、課題解決できるようにする。	全ての学年の児童が探究学習発表会に取り組み、グループで調査・まとめ・表現するなど協働的な学びを通して解決していく学習活動を実践していく。	A	
②	【学力調査結果】 品川区学力定着度調査で、各教科全国平均より10ポイント上回るようにする。	令和7年度学力調査では、実施した全ての学年・全教科で全国平均を上回っている。国語科4、5、6年生・算数科5、6年生・社会科5、6年生において全国平均を10ポイント以上上回っている。理科では、4年生2.7ポイント、5年生5.1ポイント、6年生5.3ポイントで上回る状況となっている。	B	低学年の算数科では、苦手な児童を抽出して基礎基本の定着を図ることができた。一方、3年生~6年生の算数科では、欠員により算数少人数担当が不在となる期間が長く、十分に個々に指導することができなかった。未来塾では、入塾した児童に毎週、指導員が個別に学習支援を続けて行うことができた。来年度も回数を確保し、学習する環境づくりと定着を図る。
	【個に応じた学習活動】 算数科で習熟度別学習や指導助手の有効活用を実施し、個々の学力に応じた学習を展開する。	低学年では、支援が必要な児童を抽出し、個に応じた指導を行うことができた。3年生以上に関しては9月から12月まで算数少人数が不在となり、習熟度別学習の展開が不十分であった。	B	
	【学習支援】年間20回程度の品川地域未来塾(寺子屋)の計画的実施、基礎基本的な計算ドリルの活用により、個別支援が必要な児童の計算力の定着を図る。	未来塾を計画的に進めることができ、指導員が個の習熟に合った指導を続けることができ、計算力の定着を図った。また、今年度は音読活動にも触れ問題を読み取るという活動も取り入れた。	A	
③	【読書量の増進】 読書を推奨する。1-4年生は月6冊、5、6年生は月2冊以上の読書量を確保する。	毎月2回程度日本語と英語の読み聞かせを行い、読書に親しむ習慣を付けている。また、約4か月ごとに読書週間を設けた結果、一人あたりの読書量はどの月も前年度のポイントを0.1~0.4ポイント上回った。しかし、1~4年生は約5.9冊、5、6年生は1.7冊であった	B	今後も図書館スタッフと図書委員会が連携して読書週間の推進に取り組む。読書量の多い児童を称賛する場面をつくるなどし、意欲を高める。図書館の環境構成については、引き続き学校ボランティアにも協力を仰ぎ、よりよい環境づくりに取り組む。
	【貸出方法の改善】 図書の通常の貸出数を1回3冊とし、各期間によって貸出数を増やし、読書を推奨する。	11月までの一人あたりの1か月の平均貸出冊数は約4.5冊であり、目標に到達することができなかった。読書週間を周知したことで積極的に読書に親しむ児童が増えたことは成果である。	B	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

令和6年度 学校評価 品川区立第三日野小学校

評価項目2 人間性や社会性に関すること

重点目標		【基本的な考え】 ◇教師と児童が信頼関係を深めたり、児童同士が学習活動を通して関係を深められるような教育活動を展開し、児童が前向きに学校生活を送れるようにする。 【重点的な実践内容】 ・教員や児童がすすんであいさつを交わす習慣をみにつける。 ・市民科地区公開講座を開き、人間関係に関すること、社会に関することなどを中心に一人一人が自己対峙できる授業を行う。 ・市民科や日常の学校生活を通して、相手を思いやる気持ちや自己肯定感をもてるようにする。		
評価指標	最上段: 成果指標	最上段: 成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降: 取組指標	2段目以降: 取組指標の達成状況の説明		
①	【学校風土調査の結果】 「私は学校が好きだ」の項目で、偏差が50を超えられるようにする。	7月と12月に行った学校風土調査の平均は、50.45ポイントであった。	B	学校風土調査では、「学校が好き」という項目がほぼ平均的な数値であった。教員が児童と関わり、信頼を深められるように休み時間は外で遊ぶことを奨励していく。積極的な遊びをとおして児童同士の関係もつなげていきたい。外遊びをしている教員の数値を76%の数値を80%まで上げるように工夫改善をおこなっていく。
	【児童理解】 教師は、週1回以上児童と外遊びを行うなど、人間関係を把握し、良好な関係作りに取り組む。	マラソン週間・なわとび週間・スポーツチャレンジウィークなどの体育的活動を活用したり、児童とボール遊びや鬼ごっこをしたりして休み時間を過ごす教員が76%と多い。	B	
②	【あいさつの定着度】 学校公開アンケートで「あいさつ」についての肯定的な評価が85%を上回るようにする。	10月の学校公開のアンケートでは、肯定的評価は90%であった。 挨拶の大切さや意義を継続的に伝え、指導していく必要がある。	A	10月の学校公開のあいさつに関する肯定的な意見が多かったが、あいさつ週間等の取組でのあいさつと取組が終わってからのあいさつでの様子では、声の大きさやあいさつする児童数に開きがあった。来年度からは看護当番が校門に立ち、あいさつをどんどんしていく。また、子どもたちからのアイデアを取り入れて子どもたちが主体的にあいさつができる取組も増やしていく。
	【児童主体のあいさつ活動】 生活委員会を中心に、児童主体で「あいさつ」が広がる取組を年に2回以上行う。	教師も児童も共に挨拶ができる環境づくりとして、生活委員による挨拶週間を実施できた。「三日野あいさつ名人」の取組と併せて挨拶がより浸透していくように指導するとともに組織的な工夫改善が必要である。	B	
	【言語環境の整備】 教師自らが日頃から手本となる挨拶・言葉遣いを行い、学校の言語環境を整える。	教員の言葉が学校の言語環境をつくっていることを教員自身が自覚し、児童に分かりやすい言葉遣いで話すことを、今後実践していく。	B	
③	【地区公開講座】 市民科授業地区公開講座のアンケートで肯定的評価が80%を上回るようにする。	平日実施ということもあり、参観者や講座への参加者が少なくアンケートの実施を行っていない。各学年で、児童の実態にあった授業を行い、道徳的な心情を培う取組を行った。	B	クラスフェスタでは、各学級で取り組みたいことを出し合い開催することができた。 自治的活動では、委員会や縦割り班を6年生が引っ張り、5年生に代を引き継ぐことができた。来年度は、教室の配置を工夫し、縦割りの交流が活性化するようにしていく。
	【人間関係形成領域】 自分や友達のよさを見付け、互いを認め合う大切さが実感できる学習活動を行う。	クラスフェスタでは、各クラスで子どもたち同士でめあてに向かって意見を出し合うことができた。主体的に活動し、児童同士で相互理解を深め、達成感をもつことができた。	A	
	【自治的活動領域】 社会的な判断や行動が取れる学習活動を展開する。	委員会活動や縦割り班活動では、上級生が下級生へ手本を示したり、活動を助けたりしながらよりよい関係をつくることができた。学級の係活動も意欲的に取り組む児童が増えてき	A	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

令和6年度 学校評価 品川区立第三日野小学校

評価項目3 体力・健康に関すること

重点目標		【基本的な考え】 ◇児童が生涯にわたって、運動に親しむ資質や能力の基礎を育て、体力の向上や健康の保持増進を図る。 【重点的な実践内容】 ・テクニカルアドバイザーを活用し、興味・関心を高め楽しさを味わわせる授業を展開し、体力・運動技能の向上を図る。 ・ワンミッツエクササイズやスポーツトライアルを実施し、日常的に運動に取り組ませる。 ・食育の学習を通して食や健康に関する知識や関心を高めさせる。		
評価指標	最上段: 成果指標	最上段: 成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降: 取組指標	2段目以降: 取組指標の達成状況の説明		
①	【主体的な運動習慣】 80%の児童が、すすんで運動に取り組むことができるようにする。	23学級あるうちの16学級で児童が80%以上すすんで運動に取り組むことができた。	B	80%以上を目標としているが、7学級がすすんで運動に取り組むことに到達することができなかった。外遊びや休み時間の体育的活動を推奨する。授業では、指示を短くして、運動する時間を確保するとともに、テクニカルアドバイザーを活用して運動が苦手な児童に助言や補助を行いながら個に応じた運動技能を高めていく。
	【運動量の確保】 体育授業1単位時間の50パーセントは、運動学習になるような授業づくり、授業展開を行う。	およそ90%の学級で、運動中心の授業展開を行うことができ、運動量の確保ができた。来年度も指示を短く工夫して運動量を増やせる手立てを構築する。10%の学級に関しては、運動量が増える授業展開の工夫を促す。	A	
	【TAの活用】 テクニカルアドバイザーを活用し、教具の準備を早め運動量を増やすとともに個に応じた指導を展開する。	学校全体の80%以上の学級でテクニカルアドバイザーを活用し、体育科の授業実践を行うことができた。TAを効果的に活用することで、準備時間の短縮や技能面の指導が向上した。20%は勤務時間上の関係で活用ができなかったため、時間割の工夫改善を行いながら学校全体がTAを活用できるように促す。	A	
②	【外遊びの奨励】 80%の児童が週3回以上外遊びを行い、日常的に体を動かし、運動技能の向上を図る。	多くの児童が休み時間は外遊びをして過ごしている。体育的活動の時間なども実施しながら、日常的に運動する時間を設けている。76%の教員が進んで外遊びを行い、児童を促しているが、教室で過ごす児童もいる。教員も外遊びの意識付けを行い、全児童が1日1回は外遊びができるようにしていきたい。	B	外遊びを教員から推奨し、1日1回は外で体を動かす児童を増やしていく。来年度は80%の児童が週3回以上外遊びを行う習慣を付けて行く。 品川区の取組であるスポーツトライアルを取り入れた体育科の授業や体育的活動の時間を継続的に実施していく。
	【運動の日常化】 スポーツトライアルなど日常生活で運動に親しむ機会をもたせ、体力・運動能力向上に努める。	80%以上の学級でスポーツトライアルを取り入れた授業づくりを実施している。単元の運動領域に合わせた種目を組み合わせながら体力・運動能力の向上に努めることができた。	A	
	【全校的取組】 体育朝会、チャレンジジャンプや短縄カードの取組を通して、運動技能の向上を図る。	全学年を通して、チャレンジジャンプに取り組み、個の技能を伸ばすことができた。また、マラソン週間、スポーツチャレンジウィークも実施し、取組を広げることができた。	A	
③	【食事の調整】 児童自身が自分自身にあった食事の量を知り、給食を行うなかで、給食の残飯率を10%以下にする。	通年を通して、残飯率はおおよそ6%程度となっている。自分自身で食事の量を調整できる児童が増えている。	A	全学年で、自分が食べられる量を調節できるような指導を行い、来年度も残飯率が10%を下回るようにしていく。そのために今年度同様に、食育に関する指導を通じて、児童が食を大切にする心情を育てる。
	【食育の推進】 食に関する啓発教材を活用し、知識や心構えを高める指導を、各学年で行う。	低学年では、給食指導開始に合わせて、「エンドウ豆のさやむき」「トウモロコシの皮むき」の体験を通して、「食」についての学習した。中学年では、フードロスについて市民科で扱った。また、高学年では放送委員が毎日献立紹介を行うなど、「食」に関する指導をおこなった。	A	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

評価項目4 いじめの防止の取組に関すること

重点目標		【基本的な考え】 ◇複数の教員の目で児童の変化をいち早く察していじめを早期に発見する。いじめが生じた際は早期に対応する。 ◇地域や家庭と連携し、いじめ根絶の取組をしていく。 【具体的な内容】 ・いじめは絶対に許されないとの強い意識をもち、日々の教育活動全体をとおしていじめの発見や指導・助言、啓発を随時行う。 ・「生活アンケート」などで相談や個別にみていく必要のある児童に対しては、継続的に状況を確認していく。 ・学校におけるいじめへの対応やいじめ問題の重要性を地域や保護者に伝え、家庭や地域と連携協力を図る。		
評価指標	最上段: 成果指標	最上段: 成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降: 取組指標	2段目以降: 取組指標の達成状況の説明		
①	【学校風土調査】 「この学校の先生は、いじめなどをしっかりと注意してくれる」の項目で偏差50ポイントを上回る。	第1回の調査では50.8ポイントであった。第2回の調査は51.0ポイントと児童が感じる意識は高まっていると言える。	B	学校風土調査の「いじめなどをしっかりと注意してくれる」の項目はほぼ平均的であった。いじめを許さない指導がより効果的にすすめられるように、トリプルチェンジの授業実施と併用していく。
	【市民科等】 市民科学習を中心に、すべての教育活動でいじめ防止や正しい人権意識を育てよう指導する。	年間3回の「トリプルチェンジ」の授業実施を行い、いじめが起こる心理的原因や具体例を挙げ、いじめについての理解を深めさせた。また、実際の場面でも、当事者と向き合って指導していく。	A	
②	【教員によるいじめの対応】 「ふれあい月間」や普段の様子、多くの教員が子どもたちの様子を観察し早期発見に努め、組織的に早期対応を行うことにより、いじめの解消率を100%とする。	アンケートや日常生活での児童観察を通し、いじめに繋がるような行動は予防的に指導をすすめている。法律上いじめの定義に照らし合わせ、指導をすすめているが、100%の解消はできなかった。	B	法律上のいじめの定義に照らし合わせたとき、100%の解消がきでなかった。今後は100%にこだわらず、Dアンケートによる具体的な事実に基づく指導とデイケンによる日々の相談システムを活用し、いじめの早期発見。早期対応に取り組む。また、月に1回、いじめ対策委員会を開き、全学年で現状把握や指導の進捗を確認し、組織的な対応を引き続きすすめていく。また、これまでと同様に各関係機関や保護者と連携し、情報共有や問題行動の改善に向ける。
	【各種リソースの活用】 いじめDアンケートやデイケン・Nicoliを実施し、関係を客観的要素でも把握できるようにする。	いじめDアンケートやデイケンなどのアンケートツールを活用し、いじめの早期発見と早期解決に向かうことができている。すべての事案の解消に向けて取り組んでいる。	B	
	【組織的な対応】 週1回生活指導夕会で情報共有を行う。問題行動は対策委員会を中心に、組織的な対応を行う。	週1回の生活指導夕会での情報共有だけでなく、月に1回はいじめ対策委員会を開き、現状について確認し、話し合い、組織的な対応をすすめている。	A	
	【関係諸機関との連携】 スクールカウンセラー、ハーツ等と連携協力して、早期解決できる体制を強化する。	報告・連絡・相談を密に行い、いじめに繋がる小さなできごととも学年、学校で共有している。	A	
	【家庭との連携】 連絡手段や相談体制の周知など、児童・保護者と迅速に情報共有・相談ができる環境づくりを行う。	情報共有と共に、多くの教員が児童と関わり、問題行動の改善に向けて指導を進める。	A	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

評価項目5 (特色ある教育活動に関すること)

重点目標		【基本的な考え】 ◇品川CSの特徴を生かし、学校と地域、保護者が協働して学校の教育活動の活性化を図る。 ◇行事や児童同士が関わる活動を通して、リーダーシップを育成したり、個の伸長を図ったりする。 【具体的な内容】 ・自ら課題を見付け、探究的な学びができる場を設定する。異年齢児童同士の交流を通して、自分の考えを広げたり深めたりする。 ・感性を育てる、音楽科・図画工作科指導を充実させる。 ・校内研究を通して、教師の授業力の向上を図り、日常の授業実践につなげる。		
評価指標	最上段:成果指標	最上段:成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降:取組指標	2段目以降:取組指標の達成状況の説明		
①	【品川CSの推進】 学校地域Co中心に、校教協や学校地域支援本部を円滑に機能させ、教育活動の充実を図る。	学校地域コーディネーターを中心に、地域未来塾を開催し、教員と連携を図りながら教育活動の活性化に取り組むことができた。	A	学校地域コーディネーターの活用により、学校の中で多くの取組ができるようになった。地域人材を活用して、英語や日本語の読み聞かせや茶道の指導や補助員の手配など様々な分野で地域との架け橋となった。来年度のコミュニティー・スクールデイは児童と校区教育協働委員が意見交流できる場を設定していき、より地域と学校の繋がりを活性化させていきたい。
	【学校支援地域本部の活用】 学校支援ボランティア等による教育活動の支援や教育環境の整備を組織的に行う。	学校地域コーディネーターを中心に、読み聞かせボランティアや地域人材を活用した学習活動の補助を行い、充実した教育活動につなげていた。	A	
	【校区教育協働委員会の運営参画】 校区教育協働委員会は学校運営に参画し、有効な支援活動を企画する。	学校行事の参観やコミュニティー・スクール デイを活用し、児童と交流を図り教育活動への理解や共感をえることができた。今後も支援活動ができる組織をつくっていく。	A	
②	【体育科を通じた主体的で協働的な学習の推進】 校内研究を通して、児童が主体的に他者と関わり合いながら思考、判断、表現力を培う授業づくりを行う。	講師の先生の指導を受け、校内研究の実施を行う中で、児童が友達と関わり合いながら運動に取り組む姿が全ての学年の研究授業で見られた。運動のポイントなど、思考し、他者に表現する力が養われている。	A	年間を通じて体育科の研究授業をおこなったことで、体育の学習の作り方を学ぶことができた。体育科の授業では用具や場を工夫している教員が増えたことが成果である。探究学習発表会では、全学年でテーマに沿って工夫のある発表ができた。音楽会では、児童が主体的に演奏でき、達成感を得られることができた。展覧会でも、個々の作品作りによって達成感が得られるようにしていきたい。
	【探究学習発表会】 各学年が探究学習発表会を実施し、児童一人一人が自己の成長を実感できるようにする。	10月と2月に探究学習発表会をおこなった。生活科や市民科一貫プランを中心に、主体的で探究的な学びを実践することができた。	A	
	【音楽発表会】 主体的に表現する学習活動を展開し、創造性と協調性を育む。(行事の効率化、スリム化を検討する)	音楽発表会では、どの学年も演奏や歌唱から一体感のある発表ができた。引き続き、来年度の展覧会の効果的な実施を検討する。	A	
	【異年齢交流】 「1年生のお世話」「クラブ」「委員会活動」を通して、異年齢交流を通して、集団や社会における生活及び人間関係をよりよくしようとする力を養う。	音楽発表会では、異学年の発表を聞き、感想を送り合った。また、クラブや委員会、縦割り班を通して他者を認め合うことができた。回数や増やしたり、活動を工夫したりして、交流が深まるようにしていく。	B	
	【たてわり班活動】 「三日野ふれあいタイム」を月1回程度班活動を行い、上学年は高学年の自覚を、下学年は上学年に親しみや尊敬の気持ちをもてるようにする。	三日野ふれあいタイムでは、6年生を中心に遊びを通じた異学年交流ができた。また、スポーツチャレンジウィークでは、体育委員会の児童が低学年に幅跳びやシャトル投げを教えるなどの活動を通して上級生と下級生が交流をもつことができた。	A	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成